

北國街道を歩いて行った人々『方言修行 金草鞋 第十八編』 十返舎一九

宮本眞晴

河北潟湖沼研究所河北潟歴史委員会¹

〒 929-0342 石川県河北郡津幡町北中条ナ 9-9

要約：十返舎一九の『方言修行金草鞋』を取り上げ、俱利伽羅峠から金沢までの道中に登場する地名を中心に解説した。

キーワード：十返舎一九，方言修行，俱利伽羅，津幡，金沢

1 はじめに

宮本(2012)では、『明治天皇北陸巡幸誌』、『明治行幸史料』を取り上げたが、今回はあまり読まれていない十返舎一九の『方言修行 金草鞋』を取り上げる。十返舎一九は「じっぺんしゃいっく」と読む。

十返舎一九は享和二年(1802)に刊行された「東海道中膝栗毛」では弥次郎兵衛⁽¹⁾・喜多八⁽²⁾を主人公として書いたが、姉妹編の「金草鞋」では奥州の狂歌師鼻毛の延高^(はなげのびたか)・僧千久良^(ちくくら)(築羅^{ちくろ})坊の両名を、江戸見物を皮切りに全国津々浦々を遍歴させている。作者の十返舎一九は明和二年(1765)～天保二年八月七日(1831・9・12)駿河国駿府(静岡市葵区)に町奉行所の同心の子として生まれる。本名・重田^{さだかず}貞一、幼名・市九、通称・与七、幾五郎、号・酔翁、十返舎。江戸時代後期の大衆作家・浮世絵師。日本で最初に文筆でのみ自活した作家である。

江戸へ出て武家修行し、天明三年(1783)十九歳の時、大坂(明治期から大阪と表記)へ移り、町奉行小田切土佐守に勤仕したが、ほどなく浪人し、義太夫語りの家に寄宿し、浄瑠璃作者となった。また、志野流の香道を学んだ。

寛政元年(1789)二十五歳『近松与七』の名前で浄瑠璃『木下蔭狭間合戦(このしたかげはごまがっせん)』を合作した。この本の挿絵は一九自身が描いた。文を書き、挿絵も描ける一九は版元にとって非常に都合のよい作家であった。

大坂時代、材木商の家に入婿して離婚。寛政八年(1789)頃、江戸長谷川町(東京都中央区日本橋掘留町二丁目)の町人の入婿となったが、放蕩のためか、享和元年(1801)離婚された。文化元年(1804)お民を娶って一女をもうけた。

享和二年に出版した滑稽本⁽³⁾『東海道中膝栗毛』(全八編・発端一編の計九編・江戸から大坂まで)が評判を呼び、文政五年までの21年間、次々と続編(全十二編・金毘羅、宮島参詣から木曾街道を経て江戸まで)を書き継ぎ大流行作家となった。並行してだした『方言修行 金草鞋』(全二十三編)も広く読まれた。彼は自書に挿絵も書いている。そのほかに約20年にわたり、毎年20部前後の新作を書き続けた。

2 時代背景

当時の識字率は世界最高で、明治以前の識字率の記録は残っていないが、明治十年(1877)滋賀県の調査では「六歳以上で自己の姓名を記し得る者」の比率は「男子89%女子39%」であった。

又、内訳をみると

・自己の氏名・村名のみを記し得る者	63.7%
・日常出納の帳簿を記し得る者	22.5%
・普通の書簡や証書を自書し得る者	6.8%
・普通の公文書に差し支え無き者	3.0%
・公布達を読み得る者	1.4%
・公布達に加え新聞論説を解読できる者	2.6%

以上のように、識字率は高く、確実な記録が残る

¹ 連絡先 tel.076(288)2409 fax.076(288)2962

近江国神埼郡北庄村（現・滋賀県東近江市）に在った寺小屋の例では、入門者の名簿と人口の比率から、幕末期に村民の91%が寺小屋に入門したと推定される（八鍬, 1992）。

江戸末期は「読み書き算盤」ができて当たり前という時代で、貸本屋という商売も現れた。当時、日本を訪れた外国人の記録に、駕籠かき・人足など教養とは無縁に見える下層の人たちが、高札を読んでいる姿を見て驚いたとの記録もある。

一九の辞世の句は「此世をば どりゃおいとまに せん香の 煙とともに 灰左様なら」。

火葬にされた際、一九があらかじめ死出の衣裳の頭陀袋に仕込んでおいた花火が爆発し、立ち合った人々を驚かしとの話が残っているが、友人の落語家の林家正蔵が作った話とも言われている。

当時の戯作者たちの辞世の句は洒落ているので、いくつか紹介しよう。

「今までは 他人が死ぬと 思いしが 俺が死ぬとは こいつあたまらん」大田蜀山人^{しよくさんじん}、幕府の役人で洒落本を書き、狂歌師として超一流の作品を残した。大田南畝^{なんぼ}・大田直次郎^{よものあから}・四方赤良。「善もせず 悪も作らず 死ぬる身は 地蔵笑わず 閻魔叱らず」式亭三馬。戯作者。

「執着の 心や娑婆に のこるらん よしのの桜 更科の月」朱楽菅江。蜀山人と共に天明期の有名な狂歌師。

「宗鑑は いずれに行くと 人間はば ちとようありて あよへといへ」山崎宗鑑。室町後期の連歌師・俳人。『よう』は彼の死因となった『瘍（悪性のできもの）』と『用』をかけている。「われ死なば 備前の土と なしてたべ 徳利となりて 長く栄えん」詠み人知らず（酒呑みの歌）。なしてたべ（して下さい）

「われ死なば 酒屋のかめの 下にいけよ せめて滴の もりやせんもし」守屋仙庵。歌の最後に自分の名を詠み込んでいる。

最後に山中源左衛門と云う、二代將軍秀忠の頃、江戸城に勤めていた武士の歌を紹介する。彼は道を踏み外しカブキ者（傾き者・俠客）となり、ついには切腹を命ぜられた。その源左衛門の辞世の句。

「わんざくれ ふんぞるべいか 今日だけは あすは鳥が かつかじるべい」。わんざくれ（やけ

になって）、ふんぞるべい（手足を思い切り伸ばして背をそらしてやろう）、かつかじるべい（鬻るの強い表現・がつがつ鬻るだろうから）の意。

3 十返舎一九の名の由来と主な作品

名香「黄熱香」は十度焚いても香を失わないところから、「十返しの香」と呼ばれる。彼は志野流の香道を嗜んだので「十返舎」。一九は幼名「市九」から。弟子の名に、五返舎半九・十字亭三九・九返舎一八などがある。

主な作品は表1のとおりである。

4 『方言修行 金草鞋』について

以下のとおり、『方言修行 金草鞋』には、俱利伽羅峠から金沢までの地名が登場する。ここでは、原文を引用し、それぞれの地名等に注釈をつけた。

石動の宿を離れて、俱利伽羅峠にかかる、この処^{むかし}昔時木曾義仲平家と戦ひし古戦場なり、峠に俱利伽羅不動⁽⁵⁾の社⁽⁶⁾あり、此の処、立場⁽⁷⁾の茶屋、いずれも広く清麗にて、東海道の茶屋の如く、この街道には、珍しく良き茶屋にて、砂糖餅名物⁽⁸⁾なり、此の処は越中加賀の国境なり。

（狂）商ひに 利生⁽⁹⁾ぞあらん 俱利伽羅の 不動の前の 茶屋の賑はひ

（狂）爰元⁽¹⁰⁾は 柴栗から の 茶屋なれや はかり込む⁽¹¹⁾程 往来の客

往来「この俱利伽羅不動さまは、此のまへ江戸へ開帳⁽¹²⁾にムざって、大きにお流行なされた程あつて、靈験^{あたらか}な不動さまだから、私は信仰でムざるが、私の息子が、兎角^{そと}戸外を遊び歩いて、一向家に居ませぬから、戸外へ出ませぬやうに、鉄鎖縛りにして、下さりませとお願い申たら、難有いことには、其御利生やら、鉄鎖縛りにはなさらずに、穴縛⁽¹³⁾になされたかして、穴入^{あないり}ばかりして居るには困ります。私は砂糖餅を三つ下さいといったに、これは二つと半分あるが、姐さんお前の食いさしか、それならばよしよし。

俱利伽羅峠よりはにみ⁽¹⁴⁾を過ぎて、竹之橋⁽¹⁵⁾の宿なり、此先に杉のせ坂⁽¹⁶⁾あり、夫より津端⁽¹⁷⁾

表1 十返舎一九の主な作品

刊行年	主な作品
享和二年 (1802)	滑稽本『浮世道中・膝栗毛』
享和三年 (1803)	滑稽本『道中膝栗毛 後編』
文化元年 (1804)	滑稽本『東海道中膝栗毛 三編』
文化二年 (1805)	滑稽本『東海道中膝栗毛 四編』
文化三年 (1806)	滑稽本『東海道中膝栗毛 五編』
文化四年 (1807)	滑稽本『東海道中膝栗毛 六編』
文化五年 (1808)	滑稽本『東海道中膝栗毛 七編』
文化六年 (1809)	滑稽本『東海道中膝栗毛 八編』
文化七年 (1810)	滑稽本『続膝栗毛 初編』
文化八年 (1811)	滑稽本『続膝栗毛 二編』
文化九年 (1812)	滑稽本『続膝栗毛 三編』
文化十年 (1813)	滑稽本『続膝栗毛 四編』, 合巻(4)『方言修行 金草鞋 初編』(江戸見物), 同『同二編』(東海道中), 同『同三編』(大坂見物)
文化十一年 (1814)	滑稽本『東海道中膝栗毛 発端』, 滑稽本『続膝栗毛 五編』, 合巻『方言修行 金草鞋 四編』(西海道中), 同『同五編』(木曾街道), 同『同六編』(奥州路), 同『同七編』(仙台まで)
文化十二年 (1815)	滑稽本『続膝栗毛 六編』, 合巻『方言修行 金草鞋 八編』(越後路)
文化十三年 (1816)	滑稽本『続膝栗毛 七編』, 同『同八編』, 合巻『方言修行 金草鞋 九編』(西国八十八カ所巡礼)
文化十四年 (1817)	合巻『金草鞋 十篇』(坂東八十八ヶ所巡礼)
文政元年 (1818)	合巻『金草鞋 十一編』(秩父巡礼)
文政二年 (1819)	滑稽本『続膝栗毛 九編』, 合巻『金草鞋 十二編』(身延山道中)
文政三年 (1820)	滑稽本『続膝栗毛 十編』, 合巻『金草鞋 十三編』(善光寺草津道中) 四編』
文政四年 (1821)	滑稽本『続膝栗毛 十一編』, 合巻『金草鞋 十四編』(四国遍路)
文政五年 (1822)	滑稽本『続膝栗毛 十二編』, 合巻『金草鞋 十五編』(東都八十八カ所)
文政七年 (1824)	合巻『金草鞋 十六編』(二十四輩旧跡巡礼)
文政十年 (1827)	合巻『金草鞋 十七編』(小湊参詣)
文政十一年 (1828)	合巻『金草鞋 十八編』(立山参詣)
文政十二年 (1829)	合巻『金草鞋 十九編』(白山参詣)
天保元年 (1830)	合巻『金草鞋 二十編』(湯殿山月山羽黒山参詣)
天保二年 (1831)	合巻『金草鞋 二十一編』(南部路之記), 十返舎一九 死去
天保三年 (1832)	合巻『金草鞋 二十二編』(伊豆紀行)
天保四年 (1833)	合巻『金草鞋 二十三編』(江の島鎌倉箱根七湯めぐり)

の宿に至る。

(狂) 一と群に 来る同者の 旅雀 しなよく宿る
竹のはし宿⁽¹⁸⁾

侍「コリヤ馬子, 其方の足元鳥目⁽¹⁹⁾」が百文落ちてゐる, 拾って身共へ遣せ遣せ。これは其方の前に落ちてあったけれども, 身共が見つけたから, 此の方の物だぞ。馬子「イヤこれは私が落したのでムざりますから, 私の方へ下さりませ。侍「これははしたり, 其方のであったか, 夫では是非がない, しかれば身共, 見つけ損を致したといふものは, 何日何時如何様の損を致さうも知れぬものだ。仕方がない。」「ヤア私のかと思つたら, 私の銭は同是腰に着けて

あつたから, 此の銭は誰か遺失したのでムざりませうが, 私へ下されたとてから, 同是私のがに致しませう。侍「これは如何なこと, 又損を致した残念残念。やっこ「私は此宿の産れで, 以前は何の某とて, 歴々の身の上であつたが, 庄屋どのと口論して, 此の宿に居れず, 江戸へ往たものだから, 己やれ何卒相應の武士になつて, 鎗一と筋持たせて, 故強へ帰り, 昔時の恥を雪がんと思ひ込んで, 奉公大切と勤めたものだから, まんまと今二た腰を差す身分になつて, 鎗一と筋を持たせはしない, もつやうになつたから詰らぬ, ここは隠れて通り抜けませう。「内儀さんこの菓子は旨いから, 皆買って遣りたいが, お前御亭

主があるかないか、無などといへば其通り、あるといつて見なさい、それこそ私も武士のはしくれたから、一寸も後途へは引かぬ、量見があるから、正根を定めて、あるならあると有躰にいふがよい、何だ歴乎とした亭主があるへ、あるなら宜敷申して呉れ。

津端の宿、追分⁽²⁰⁾あり、左の方⁽²¹⁾能登へ行く道なり、直に行けば金沢道、中條大田⁽²²⁾二日市を過ぎて、森本という処より、川尻⁽²³⁾のほうへも行く道あり、此の処より金沢へ二里。

(狂)紫の霞棚引く 春の日や こも名に負ふ かきつばた宿⁽²⁴⁾

法師「私は何ういふことか、無性に女に惚られて、其中にて罪を造ることもあるから、寧そのこと罪滅しに、坊主にならうと思つて、此の様に天窓を円めた処が、出家になつても、同是婦女^{をんな}が惚れて罪を造らせるから、寧そこれは、^{とて}迎も遁れぬ罪障なら又還俗して、毒食はば皿とやら、なんでも世界中の女を、情婦にして遣ろうか、しかし爾うしたら、世界の男共が困るであらうから、これも大勢の難義になること、^{そう}爾もなるまいから、然らば還俗も出来ず、坊主にもなられず、仕方がないから、頭を半分還俗して、半分は坊主で居やうと存じます。恋ゆゑ愚僧はいろいろと苦勞が絶へませぬて。往来「夫は似たことがあるものだ。私もどうしたことか、兎角女に惚られて困り果る。毎日毎日私の家へ、女の駈け込で来るのが夥しいことで、なんでも妾を情婦にして下され、イヤ其方よりか妾が先だから、妾が情婦になると、互ひに争ひ八ヶ間敷、果しがつきませぬから、其所で私が工夫を致して、これは惚人が大勢だから、怨み恋⁽²⁵⁾のないように、大きな抽籤にして、其本籤に命中した人と、情婦にならうと申たら、これは妙趣向だと、日限を定めて、私に惚た連中へ、廻状を廻して招び集め、それから一人宛籤を取らせられた処が、聴きなさい、其中で一番大年増のお多福奴に、本籤が当たつたから、皆羨ましがつて、これは何うしてお前に本籤を取られたやら、お前は咒の抄子⁽²⁶⁾でも、持て来なさつたかと聞いたら、彼のお多福どのが、妾は抄子では入りませぬ、これに当りますやうにと、此摺粉木を持て来ましたと、懐中から出して大笑をしました。「なんだ此の人は、無性に女が駈け込で来て困るといふが、俺の家には毎日毎日債鬼が駈け込んで来て困る、私は自家に居られ

ず、掛け出て歩くが、同一恋^{おなじ}でも私のは借錢^{しやくせん}恋だから、詰まらぬ詰まらぬ「私はまた男の方から惚た女の処へ、矢鱈に掛け込んで見るが、何所へ掛け込んでも、直きに大屋さまへ尻を寄して、引とられるものだから、此の頃は^{おなじ}大屋さまどのが、私を気でも狂つたかして、毎晩長屋の井戸へ蓋をしられます。

金沢は北国第一の御城下にて、繁華の所なり町の長さ凡そ九十丁余、諸色⁽²⁷⁾の間屋商店、軒を並べて賑はしく繁盛なり、此の所より宮の越し⁽²⁸⁾へ二里、ゆわく⁽²⁹⁾へ三里、大せう寺⁽³⁰⁾、しつゑん寺⁽³¹⁾、てんとく院⁽³²⁾等いふ巨刹あり、其外寺社夥多あり算へ尽し難し。

(狂)金沢の水⁽³³⁾に潤ふ 町並も ゆたかに住める 土地の賑ひ

「爰元は加賀蓑、加賀⁽³⁴⁾笠の名物と聴きました、私も調べて参りませう、私は濡事師だから、何日何時濡事に、かかるまいものでもないから、其用心なり、又若しふられまい⁽³⁵⁾でもなくそれさへあれば、どの道、間に合ふから重宝でよい、「左様左様私は又、隠蓑、隠笠⁽³⁶⁾望みて此の間大金を出して、購求しましたが、成程宝物程あって、奇妙なことには、其蓑笠を着ると、其人の形が見へませぬから、其所で隠れ蓑、隠れ笠、これは其人が見へぬ筈、笠も深い大きな笠、蓑もたつぷりと大きいから、これを着ると、其人の形は皆隠れて見えぬは、奇妙でムざります、夫によいことには、畑に瓜西瓜の出来た時、案山子では、鳥獸は人かと思つて恐怖ますが、瓜西瓜を窃取に来る盗賊共は、恐怖ませぬから、其所で私が其蓑笠を着て、案山子の代り、畑の番をして居る、泥棒が来ませぬから、これは重宝だと方々へ頼まれ、大分賃銭を取りましたから、成程アノ蓑笠は宝物でムざります。

奥州の狂歌師、千久良坊鼻毛の延高、二人は次手ながら、白山へも参詣の志なれば、まず金沢までを十八編として、この後白山参詣の紀行を、十九編として続いて出版の目算にて此の編はここにて筆を差置きぬ、先ずは長途の道中恙なくて目出度し目出度し。

(狂)矢鱈書く 筆はさながら 箒木⁽³⁷⁾にてはき尽されぬ 金の草鞋か

「先ずはことしも大きに執拗けました、此の後編を直ぐに、つづいて白山へ参詣の道々、思入れ洒落

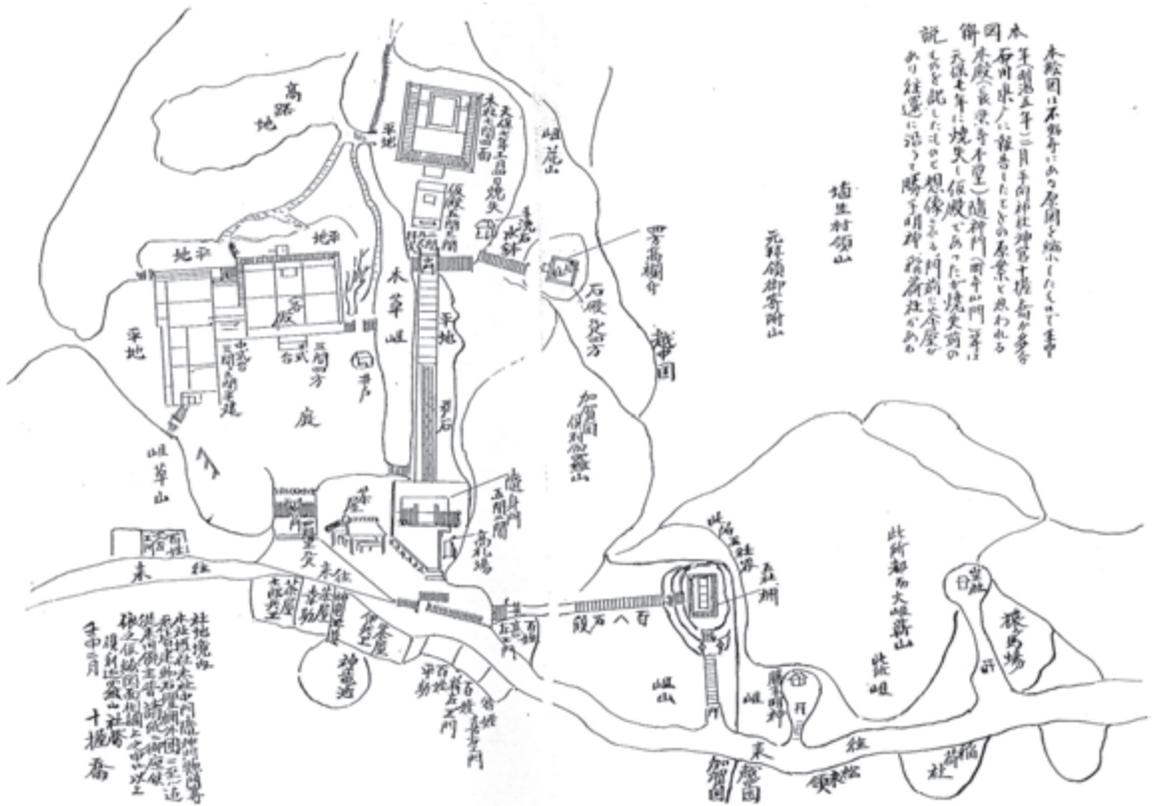


図1. 天保七年の消失以前の俱利伽羅不動長楽寺の絵図（小矢部市史（下）752-753頁より）。

て遣りませう。『目出度い目出度い、此の様に達者で洒落て歩く程面白いことはないぞ。

方言修行 金草鞋第十八編 終

5 おわりに

表題の「方言修行」とは「武者修行」の振りであろう。作者の十返舎一九が実際に北陸路を旅したかどうかは明らかではない。当時は道中案内書、各種名所図会、分間絵図、紀行の類が数多く出版されており、江戸に居ても道中記を書くことは可能であった。

『金草鞋』に所々出てくる間違いも、疑問を持たれる一因とも言える。しかし、七尾市のさる旧家（近世末期までは酒造家）に弥次・喜多と芸者を描いた一九自筆と称する扇面画所蔵されている事、一九が三十代に北陸を放浪したという事、『金草鞋』十八編緒言に「予、一と歳加越に遊びて」とあったり、

十九編序に「予、越前の方依り（白山に）詣でたるゆゑ」などとあったり、加賀地方独特の訛りを本文中に取り入れたりしていることは、実際に来遊したのかもしれない。

添付の絵図（図1）は小矢部市史（下）752・753頁より、天保七年（1836）の俱利伽羅不動長楽寺焼失以前のを転載した。右上に小矢部市史に掲載する際、書き入れたと思われる「本図解説」が、左下に明治五年（1872）神職十握氏の記述がある。

作図した十握氏（手向神社の神職と別当寺である長楽寺の僧とを兼務）は明治期、焼失した長楽寺があった山頂を離れ僧職を捨て俱利伽羅村竹橋（現・津幡町竹橋）へ下山。俱利伽羅神社の神主となった。同時に長楽寺は廃寺となり、昭和二十四年（1949）金山穆韶高野山大僧正により、所縁の地に俱利伽羅山不動寺として再建された。天保の火事は門前の茶屋が火元と伝えられている。山頂で水も少なく、燃えるにまかせたのであろう。

隨身門五間二間は明治初年の神仏分離の際、現・小矢部市埴生医王院に移築されたと言われている仁王門であろうか。焼失を免れた仏像・門等は下山し、金沢市寺町宝集寺・津幡町倉見専修庵・小矢部市埴生医王院等に納められている。

勝手明神の右下、松永領の『松永』は北国（陸）街道の富山県側山麓の集落名。右上の埴生村領、拝領御寄附山とあるが『埴生村』も富山県側山麓の集落名。藩政時、俱利伽羅峠加賀側の竹橋を一番として、越中側の埴生まで二町（約 218 m）毎に三十三体の観音石像が祀られていた。32 × 218 = 6976、約 7 km の峠道であった。旅人は道端の観音像に祈りながら、峠のどのあたりまで来たかを知った。明治期、観音像は移設され、現在、峠には 3 体ほどしか残っていないが、全ての所在地（津幡町と小矢部市）は把握されている。小矢部市埴生の医王院には 11 体保管されている。寄進者は越中と加賀の人達で、観音信仰・地藏信仰の無い筈の浄土真宗（阿弥陀如来一筋）信者である事が面白い。

客殿は式台・中式台も揃っている堂々とした建物。2 年ごとの藩主の参勤交代時、休憩したものか。本殿は現在の位置と違うし、絵図中央の四方高欄付石殿九尺四方（現在の手向神社）の位置も違う。国境をみると勝手明神・稲荷社・猿ヶ馬場の山王社以外の社寺は全て、加賀領に属している。

絵図中、岨（そ）は「険しい山、岩石の積み重なった山」の意。

『金草鞋』に出てくる俱利伽羅峠の砂糖餅の砂糖は何処から持って来たものであろうか。旧門前町に残る北前船の記録をみると、讃岐・阿波から和三盆糖を購入していた記載がある。それを使用していたのだろうか。それはとても高価なものであったし、当時の人にとって格別の甘さであったと思う。和三盆は日本三銘菓、森八の『長生殿』にも使われている日本製（中国製は唐三盆）の最高級砂糖である。

注

- (1) 弥次郎兵衛・・・屋号「枋面屋」肥満体。駿河国府中（現・静岡市）出身。実家は裕福な商家であったが放蕩が過ぎて借金を作り、江戸へ夜逃げ。神田八丁堀の長屋で密陀絵（漆器に彩色する一種の油絵）などを製作。妻と死別し、東海道の旅に出る。出発時、数え年 50 歳（満 49 歳）。教養高いが下俗で軽薄な面も持つ。
- (2) 喜多八・・・出発時数え 30 歳（満 29 歳）。弥次郎兵衛の居候。元々は弥次郎兵衛の馴染みの陰間（男色の相手）であったが、弥次郎兵衛とともに江戸へ夜逃げ。商家へ奉公するが、使い込みが露見したことで、女主人に言い寄ろうとして不興を買って解雇されて行き場を失い、弥次郎兵衛とともに旅に出る。
- (3) 宝暦年間（1751～63）以後、江戸に発生した、滑稽な中に風刺や教化を盛り込んだ新しい小説本。
- (4) 合巻・・・文化年間（1804～18）以後に流行した草双紙の一種。従来の黄草紙が 5 丁を以冊、数冊で 1 部としていた製本を合冊して 1 冊としたもの。長い物は数十編におよぶ。各ページ絵入りの読物で素材・表現ともに実録・読本・浄瑠璃・歌舞伎などの影響が著しい（広辞苑より）。
- (5) 俱利伽羅不動とあるが、地名は俱利伽羅、寺号は俱利迦羅である。
- (6) 当時は神仏習合で、境内に「手向神社」が祀られている。
- (7) 街道の宿駅と宿駅の間で、人夫が荷物や駕籠をおろして休息する所。
- (8) 河合見風の狂歌に「俱利伽羅の餅に大小ふどう（不同・不動）あり 客がこんから（混むから・矜羯羅童子）亭主せいたか（気が急いたか・制多迦童子）」がある。・・・津幡町史 p 676 第三編 郷土のおもかげ ニ 各地区の景観・史蹟および伝承 津幡地区
- (9) 仏菩薩の恵。御利益。
- (10) 「柴栗」と『俱利伽羅』をかけた。
- (11) 「はかりこむ」は舂（ま）や秤（はかり）で穀物を量って容器に入れること。茶店がまるで櫛で穀物をすくい取るように、店に引き入れること。
- (12) 文政五年（1822）江戸で出開帳を行った。
- (13) 「あなはいり」とも。人目に隠れて情人と会ったり、遊所に入り浸ること。
- (14) 「はにみ」は「はにふ」の誤りか。小矢部市埴生。
- (15) 北陸（北国）街道の宿駅。津幡町竹橋。
- (16) 津幡町杉瀬の坂。運動公園から下る坂か、津

幡へ上がる坂か。当時、北陸街道は津幡川に橋をかけることを避け、竹橋から運動公園を通り、杉瀬へ抜けていた。

- (17) 北陸街道と能登街道の分岐点。
- (18) 馬子歌「竹に雀は品よくとまる。とめてとまらぬ恋の道」をふまえ、旅人を一群（ひとむれ）の雀にたとえる。「同者」は団体を組んで神社仏閣に参詣する人。「旅雀」は旅行慣れた人の意。雀のとまる「竹」と「竹橋」をかけた。
- (19) 銭のこと。
- (20) 分かれ道。
- (21) 明治22年の合併までは津幡村、清水村、庄村、加賀爪村の四村で津幡宿を形成していた。左は金沢道、直は能登道の誤り。今は四叉路であるが、大正年間、津幡小学校への道が開くまで三叉路であった。
- (22) 津幡町太田のこと。
- (23) 森本（下）川の川尻のことか。津幡町川尻であれば森本から川尻へ行く道があったのだろうか。
- (24) 『伊勢物語』「からごろも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」を踏まえたもの。
- (25) 「怨み恋」うらみっこ（なし）にかけた洒落。
- (26) 富籤など勝負に勝つまじないに使った。杓子しやくしに同じ。
- (27) 色々な品物。
- (28) 中世以来の湊町。現在の金沢市金石地区。
- (29) 湯涌。金沢市湯涌温泉。藩政以来の湯治場。
- (30) 大乘寺であろう。曹洞宗の古刹。元禄十年（1697）現在地（金沢市長坂町）に移転。
- (31) 「しつゑん寺」は「じくゑん寺」のことか。長谷寺慈光院を金沢では「じくゑん」とも云

い「じくわうゑん」の訛音と見られる。藩政期、慈光院は石浦山王社・地主権現の別当寺であった。明治元年（1868）石浦神社となり、同12年金沢市小立野下から金沢市本多町の現在地へ遷座した。

- (32) 天徳院。三代藩主前田利常室（二代將軍得がエア秀忠の娘珠ひめ）の菩提所。金沢市小立野。
- (33) 芋掘り藤五郎の伝説を踏まえたか。
- (34) 加賀特産の菅笠。貞亨（1684～87）ころから全国に流行し、諸国で用いられた笠の大半は加賀産であった。金沢市笠市町（金沢駅前）に加賀笠の市場があった。
- (35) 雨に「降られ」と女に「振られ」をかける。
- (36) 着用した者の姿が見えなくなるという神秘的蓑・笠。昔話では天狗の所有する宝物。隠れ笠に加賀笠を絡ませる趣向は狂歌にもある。「秘蔵して 持てど宝の 名には似ず 世にはかくれぬ 加賀の菅笠」
- (37) 「箒木にて」は「筆は」を受け、更に、「はき尽くされぬ」にかかる。「はき」は箒木で「掃き」と草鞋を「履き」をかける。『金の草鞋』は、鉄製の草鞋で、いくら履いても減らない草鞋。

文献

- 小矢部市史編集委員会。1971。『小矢部市史 下巻』。752-753。
- 八鍬友広。1992。19世紀末の日本の識字率に関する一考察。日本教育学会大会研究発表要項、51：124。
- 宮本眞晴。2012。明治天皇北陸巡幸とその時代背景。河北潟総合研究、15：31-41。

